

国語科通信

大阪市立
南高等学校
国語科104号

コトバの力

数学科 市村 浩隆

「和顔愛語」：これは、私が中学を卒業した時に一・二年の担任だった数学の先生が卒業アルバムに書いてくださった言葉だ。この言葉通り、その先生はいつも顔の表情がおだやかで、言葉遣いがいつも丁寧な優しい先生であった。大変お世話になったその先生は、今年の三月定年を迎えられ退職された。同じ卒業アルバムの中で印象に残っている言葉が、「自分で自分の限界を決めるな」という言葉。当時の教頭先生が書かれた言葉だが、私が中学を卒業後程なくして、神社の狛犬の研究で大学の教授になられた、まさにその言葉通りの人であった。また小学校の担任の先生の言葉も今だに覚えている。「人間(じんかん)万事塞翁が馬」：人生にはいろいろあるが決して喜びすぎたり落ち込みすぎたりしてはいけない、淡々と生きよという中国の故事にちなんだあまりにも有名な言葉だが、いま「あなたの座右の銘は？」と聞かれると、まずこの言葉を挙げる。その時の隣のクラスの担任の先生は文集に「Poco a Poco. (一歩一歩)」と記されていたことも覚えていた。日々の積み重ね、日々の歩みを大切にしたい。そんな想いをこの言葉に感じることができた。それらの言葉と出会い、二十年以上たっても覚えているというのは、自分がそれらの言葉に支えられ、時に助けられてきたのではないかと最近感じるのである。

今年三月の東日本大震災の発生以後、テレビのCMで「日本の力を信じて」というキャッチフレーズが幾度となく流された。震災で自分を支え

ていたものをすべて失い、失意のどん底にある東北の人たちに何ができるのか：皆さんも、ニュースを見ながらいろいろ考えさせられたと思う。とはいえ私達も自分のなすべきことがあり、その人たちにしてあげられることがわからない、どうすることもできないもどかしさというものも同時に感じたのではないだろうか。そんな折、被災地の一つである岩手県釜石市の学校のみんなに寄せ書きをしたのを覚えているだろうか。一学期が始まって程なく、クラスで色紙一枚、一人一言ずつ言葉をしたためて送ったことを。あのととききつと一人ひとり心を込めて、被災地の、共に学ぶ同世代の子達を思い、言葉を紡ぎだして書いたと思う。きっと釜石の子達もそれらを見て勇気づけられたと思う。「大阪の人たちも思いは同じ」ときつと感じてくれたはずだ。コトバの力が人々の気持ちを奮い立たせ、癒しを与え、元気づけるカンフル剤になるのである。

南高校には国語科・英語科がある。ともにコトバの力をつけることが大切な学科だ。それができる環境が、本校には十分備わっている。どうぞコトバの力をしっかり磨き、たくさんのコトバを学び、思う存分表現してほしい。最後に、受験を控えた三年生に伝えたいコトバがある。前任校でもよく生徒に言っていたコトバではあるが、「百里の道を行く者は九十里を以って半ばとす」(戦国策)。決してこれで大丈夫と思わず、途中でくじけず、最後まで手を抜かないで、準備をしっかりとしてほしいと願う。



◆ 国語科特別講義 感想文 ◆

第四回特別講義(九月二十二日)

大阪市教育委員会 松本 美恵 先生

「中国への扉」の感想文

中国語の講義を聞いて

※(この感想文は、中国へ修学旅行に行く前に書かれたものです)

二年A組 永井 沙英

いよいよ修学旅行が近づいてきました。中国語の飛び交う所へ行くのはとても不安ですが、そういう不安を少しでも無くすために、この講義もしっかりと取り組もうと思いました。

まずは松本先生の自己紹介に始まりました。中国出身の方で、自分の住んでいた所や、どういった経緯で日本に来たのかなど話しておられました。中でも「日本が私を育ててくれた」という言葉には思わず嬉しくなりました。

次に、国語科全員の名前を中国語で紹介してくれました。私は、「ヨンジン・シャイン」だっと思った。自分紹介くらいハキハキしたいところですが、すでに曖昧だなんて。でも、「子」は「ズ」と言われているということだけは気づきました。

それから、プリント冊子で簡単な単語を学習しました。中でも「老婆」は「妻」の、「娘」は「母」の意味を持つということに驚きました。日本の漢字の感覚でいくと、非常に恥ずかしい出来事を起こしてしまうかもしれません。これは現地へ行くとき、注意しなければいけない点だと思います。

最後の方は発音(数字や簡単な挨拶)の練習をしました。中国へ行くのに、最低限言えたらいいな、という言葉に身をつけていきたいです。伝わるか伝わらないかは別の問題として、とにかく今回の講義を活かしたいと思います。

松本先生は講義中、日本語が出てこなくて話が途切れてしまいましたが、それ

でもこれから中国へ行く私たちのために一所懸命に教えてくださいました。そういった先生の姿からも異文化と接するに当たって重要なことを教えていただきました。ありがとうございました。

◆ 修学旅行(中国訪問) 感想文 ◆

(国語科二年生は平成二十三年十月十六日から十月二十日まで四泊五日で中国へ修学旅行に行ってきました。)

中国へ行って

二年A組 前田夢子

中国へ行って、私の価値観はとも変わりました。価値観だけではなく、前々からあった中国への偏見や外国への不安は見事に取り払われ、まるで自分の視野がぱっと明るくなるようであった。

中国は、私が予想していたものよりも遙かに壮大であった。晴れた北京には、大阪と同じようにきれいな青空が広がっていた。建物は全てが大きく、日本では到底見ることが出来ないようなデザインで作られていた。そして、それがまた私をわくわくさせるのであった。世界遺産である万里の長城や頤和園では、中国の歴史の長さを肌で感じることが出来た。故宮博物院では、まるで、昔の皇帝が見ていた景色をほんの一ミリでも垣間見ることが出来た気分になった。北京の下町も印象的であった。人力車から見えるものは一つ一つが初めてでさらさらと輝いており、どこかの映画の世界にでも迷い込んでしまったようであった。修学旅行中、ずっと付いてくれたガイドさんを始め、現地で知り合った方はみんないい人だった。月壇中学校との交流では、中国と日本の学校のつくりの違いを見ることが出来たし、月壇中学校の生徒は全員親切でもしよかった。ホームヴィジット先の家族もとても親切だった。日本語も英語も当たり前のように通じなかったが、そんなことは気にならないくらい沢山の優しさや愛情を感じることができた。他にも、ここでは書ききれな

いくらいにいろいろなものを見て聞き、学ぶことが出来た。パスポートを取ることも、入国審査で緊張したことも、言葉が通じないという怖さも、すべてが初めての経験だった。そして、そのどれもが素晴らしく私を興奮させ、また成長させた。確かに良い体験ばかりではなかった。カルチャーショックを受けた事象は多々あるし、北京市内を歩いていても怖いと思うことはあった。しかし、それを感じたことによつて、日本がどれだけ平和な国であるのかが身に染みて分かった。それだけではなく、自分の小さな視野に恥ずかしさを覚え、他の国にも沢山行ってみたいと強く感じるようになった。

この修学旅行は本当に勉強になった。いろいろな経験が出来たばかりではなく、沢山の優しさに触れ、沢山の感情を共有し、最終日には目が腫れるほど泣いた。それだけこの五日間は充実したものであった。私はこの修学旅行を忘れることはないだろう。一生忘れることの出来ない大切な思い出である。

中国で見た日本

二年B組 河合 智子

十月十六日、私が中国についてまず思ったこと、それは「空がきれい」ということだった。中国の空模様といえば「空気が汚い」、「いつも曇っている」と良いイメージがなかった。しかし飛行機を降りて空港から見上げた中国の空は、とても澄み切った青空だった。現地ガイドの劉さんの話では、前日に雨が降ったらしく、それが空気の汚れを洗い流したのだという。はるか昔、遣唐留学生阿倍仲磨呂が、中国で見た月も日本と変わらないと歌に詠んだ。それから千年以上経つが、現在も中国の空は日本の空のように澄み切っていた。どれだけ文明が進んでも空の色も月も変わらないのだとしみじみ思った。が、三日目あたりから車の排気ガスなどで空が濁りだし、最終日には視界が真っ白になるほど空気が汚れていた。思わず

「前言撤回」と叫びたくなった。

三日目、有名な天安門広場と故宮博物院へ行った。特に私は故宮博物院が印象に残っている。映画「ラストエンペラー」の舞台だったこともあるが、なによりも沖繩の首里城を彷彿させる建物が強く印象に残っている。劉さんの解説だとやはり首里城はこの影響を受けているとのことだった。厳密にいうと琉球は日本の文化とは異なるのだが、当時の中国の影響力というのはすごかったのだと広大な敷地を歩きながら実感した。遠い昔中国から様々な文化を輸入していた日本だが、今では日本の文化、特にサブカルチャーと呼ばれるのが中国へ渡っている。例えば、ホテルでテレビをつけた時も、日本のアニメが中国語に吹き替えられて放送されていた。月壇中学へ訪問したとき一緒にバドミントンをした女の子も日本のアニメをたくさん知っていたので、ずいぶん話が盛り上がった。図書室にも日本の漫画がそろっていて「こんな所に日本の文化が。」と思うと少しうれしくなった。

中国ではカルチャーショックも多かったが、こうして日本と似ているところもたくさん発見できた。習慣やマナーも戸惑ってばかりだったがそのうち慣れていった。毎日クラクションの音がひっきりなしに鳴り響く道路も、割り込みOKなトイレも、常に握っておかなければならないかばんの口も、日本ではないことだと思つと、少し悪しは別としてとても貴重な体験だった。中国といえは真つ先に悪いイメージがでてきた私だったが、今ではもう一度中国に行きたいと思うようになっていた。中国には素敵な人がたくさんいたからだ。ガイドの王先生、劉さんはもちろん、切り絵を教えてくれた先生、ホームビジットでお世話になったお母さん、レストランで出会った名も知らぬおばさん、言葉は通じなくても親切で気さくで温かい人ばかりだった。以前の私は中国の良いところを知らなかったのだ。ぜひまた中国に行きたい。今回はジェスチャーや日本語でなんとか伝わったが、次回はそれを中国語で話せるようになって。

東洋大学「現代学生コラム」入選作品

テーマ「祈り」

「祈りを実現させるための努力」

一年A組 井上 摩耶

「パワースポットに行つて祈つたら見事に願いが叶いました。」と言われると誰でも行きたくなるだろう。

私はテレビでそのような事を言っていたのを聞いて興味があったので、家族と一緒に兵庫県にあるパワースポットへ行った。そのパワースポットがある建物に入ると、入つてすぐの部屋に入れた。その部屋の中には二脚のイスが置いてあった。そのイスは外国のお城にありそうな高級感の漂うイスである。入つて右側が女性用、左側は男性用になっている。そのイスに目をつぶつて座り、祈りや願いを心の中で唱える。私の番が回ってきた。そのイスはとても大きく、触り心地も、座り心地もカンペキである。そのイスに座つた瞬間私は自分の祈りが叶うのではないかという錯覚にとらわれた。

誰でもそうだと思うが、祈つただけで叶うと思つている人はいないだろう。実際、パワースポットという場所はパワーをもらうのであつて祈りや願いを絶対に叶えてくれるという場所ではない。パワースポットには、祈りや願いを叶えてほしい、あるいはパワーをほしいという人がたくさん来るはずだ。祈りや願いといつても種類はたくさんある。恋愛、仕事、学業、健康など他にも色々あると思う。内容やジャンルは全然違つて、全てに共通して言えることは、その願いを祈つた後、自分自身の祈りや願いを実現させるためにどれだけ努力するかということが一番大事な点にある。

「祈りの種類」

一年B組 上田 実咲

人はどんな祈りをするのだろうか。例えば、宗教の関係で決まつた時間に祈りを捧げる人もいるだろうし、お正月に神社の鐘を鳴らして手を叩いてお辞儀をしたり、絵馬に願い事を書いたりするの祈りだろう。それに、七夕の日に笹の葉に願い事を書いた短冊をくくりつけるのもまた祈りだろう。祈りとは個々違うもので、どんなふう祈るかも違う。

私は小学生の頃、キックベースをやっていた。練習試合や大会など、どうしても勝ちたいときには、プレイヤーや応援してくれる人たちが心の中で(勝てますように。)と祈る。そしてその祈りの象徴である応援の声が一層大きく響き、その声を力に変えて、プレイヤーは一層頑張る。これは祈りの連鎖なのだと思つてほしいと願う人たちが全身全霊で応援して、その応援にプレイヤーは元気をもらう。それはとてもすごいことで、何ものにも変えられないのだと思つて。祈りには種類があると思つて。祈り方もそうだが、内容もまた然りだ。そして祈りには、人を動かす大きな力があると思つて。それは、先日起こつた東日本大震災での、被災者の方々の復興活動を見れば分かるだろう。日本全体が復興を祈り願うからこそ、節電が実施されたり、物資が色々な所から送られ続けている。それはとてもすごいことだ。祈りとは、自分のためではなく他人のために何かをしたいと思つて優しい心なかもかもしれない。

国語科特別講義のお知らせ(予定)

平成二十四年 一月十九日(金)

国語科一、二年生 対象

「ことばのおもしろさ ― 古典落語と創作落語 ―」

落語家 桂 三金 師匠

